

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第1回 第2.1節～第2.3節

2018年1月1日

小田 勝

このたび、拙著『実例詳解古典文法総覧』について、誤りを正し、また刊行後に新しく発掘した用例や事項を補う、同書の補遺稿を、WEB上で連載することになりました。いわば、同書の増改築工事をお目にかけますので、どうぞよろしく願いいたします。なお、2015年4月に刊行した同書は、順調に版を重ね、同年9月に第2刷、2017年5月に第3刷を刊行しました。この場を借りて、読者諸氏のご支援に、心より感謝申し上げます。

それでは、連載第1回は、「第2章 動詞」からみてゆくことにしよう。

30頁。例(2)は、上一段動詞の一覧。網羅的にするなら、ハ行に「^ひ簸る」、マ行に「^み廻る」、ヤ行に「^い沃る」が追加される。

32頁。表(2)bの二重縦線が、初刷では「語幹Ⅰ」の右にあるが、正しくは「語幹Ⅱ」の右にあるべきで、これは第2刷で修正されている。

35頁「2.2.6 活用型の変化」について。①の「恐る」は「四段→下二段」というより「上二段・四段→下二段」とするべきで、上二段が古形かといわれる。とすれば下にある「^よ避く」と同じ変化ということになる(ク語法形「恐らく」は四段から出た形)。同じく①にある「隔つ」は、『小学館古語大辞典』の「隔つ〔他タ四〕《「へだつ(他タ下二)」の古形》」によったもの。しかし多くの辞書では、「他動詞としての下二段の「へだつ」に対して自動詞の四段の「へだつ」があったが、四段の「へだたる」が用いられて、四段の「へだつ」は消滅した。」(『日本語文法大辞典』714頁)のように理解されている。④の「あはれぶ」と同様のものに「あやしぶ・うれしぶ・かなしぶ・すさぶ」があり、上二段が古形で、m音交替形の「-む」は一般に四段である。「喜ぶ」は四段化したが「-む」形は一般化せず(『時代別国語大辞典上代編』に「遊仙窟真福寺本にはヨロコムとマ行四段と認めるべき訓がある」という)、「情けぶ」は四段化せず「-む」形もない。35頁では、10行目の用例の出典表示「(古今著聞集)」に章段番号が落ちている。「(古今著聞集72)」である。

35 頁「2.2.7 複数の活用型にまたがる動詞」では、①の例に「隠るふ・備^{そな}はる」を追加する。この節の後に、「活用の限られる動詞」の節を新設しようか（本書には、「命令形を欠く語」などという節も立てられている（第 8.3.3 節））。

2. 2. 7' 活用形の限られる動詞(新設)

「掘^ほず (=掘ル・引き抜ク)」「なよぶ」は連用形、「奉る」(下二段)は未然形・連用形、「伝^つつ」「言^{こと}伝^つつ」は未然形・連用形・命令形、「消^く」は未然形・連用形・終止形しか用例をみない。「名立たり」(ラ変)は、連用形の用例が若干存するほか、ほぼ連体形に限られ、中世以降「名立たる」の形で連体詞化した。

- ◆「およすく」(「す」「く」の清濁不明)について、『日本国語大辞典 [第2版]』は「連用形「およすけ」だけが使われる」、『角川古語大辞典』は「連用形以外の形は見られない」、『小学館古語大辞典』は「若干の未然形以外連用形しかない」とするが、連体形「およすくるままに」(寢覚、新全集 306 頁)の例がある。

37 頁「2.2.8.2 形容詞・形容動詞・副詞の動詞化」では、「怪し→怪しむ」をあげたが、「怪し」の動詞化には「怪^{あや}む」(下二段)の形もある。

- ・軒近き花橘の移る香につつまぬ袖も人ぞあやむる (堀河百首)

また、「速やか(なり)→速^{すみ}やく」をあげたが、同様の例を1つあげれば、例えば「あだ(なり)→あだく(下二段)」。

- ・うちあだけ (=チョット浮気メイテ) 好きたる人の年積もりゆくままに (源・朝顔)

39 頁「2.3 音便」。動詞の音便形は、四段・ナ変・ラ変の連用形・連体形語尾にし生じない。三条西家本『和泉式部日記』に、

- ・「いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、[故宮ノ]御かはりにも見奉らむとてなむ、^{そちのみや}帥宮に参りて候ふ」と[童ガ私ニ]語る。

という本文があつて(下線部の原文は「思たまふるれば」1ウ)、形の上からは、下二段活用の「給ふ」の未然形語尾「へ」のウ音便に見えるが、二段活用の音便形も、未然形語尾の音便形も、ともにあり得ない形である(「思う給へらるれば」なら正しい形である)。本文を疑うべきであるが、諸注がこの語形に驚愕していないことの方が、私には、本文以上に不審であった。